2020 年度FD活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長（学長）　荒井　真
副委員長（教務部長）　小ヶ谷　千穂

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2020 年度は大学 FD 勉強会のテーマを「遠隔授業」としました。複数の本学専任教員からの具体的な事例に基づいた報告を踏まえつつ、遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは何か、気を付けるべき点は何かを考える機会をもちました。

加えて、「遠隔授業」をテーマにした授業参観の実施の他、授業実施状況調査などから遠隔授業の内情を把握するなど、FD の観点で新型コロナウイルス感染症への対応を進めました。

また、本学の強みである語学教育の更なる発展を狙いとして、学内で 2015 年度から継続して実施している「外国語による教授法プロジェクト」は第 6 回を迎えました。2021 年度より開始する語学の新しいカリキュラムについて、英語教育運営委員長及び初習外国語教育運営委員長から説明があり、過去の取り組みを土台として、特に語学と専門科目の教育の接続という観点からトークセッションを実施しました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査、卒業生調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めた一方、大学院では博士後期課程の学生に対して、教育能力向上のために FD 活動への参加を課すなど新たな取り組みも進めています。

目次

1.　大学 FD ワークショップ報告　1
　外国語による教授法プロジェクトシリーズ⑥
　「2021 語学カリキュラムとは～その詳細と今後の展望～」

2.　大学 FD 勉強会報告
　第 1 回　遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは
　～これまでの振り返りとコロナ後の活用に向けて～　5

3.　学修行動調査　13

4.　教育の質向上に向けた取り組み
　授業アンケートと授業改善計画　14
　卒業生調査　14
　PBL 科目の推進　16
　大学院の FD 活動　16

5.　2020 年度活動内容　16

1 第 1 回FDワークショップ　外国語による教授法プロジェクト⑥
2021 語学カリキュラムとは　～その詳細と今後の展望～

日時：2021 年 1 月 20 日（水）　12：20～13：00
会場：オンライン（Zoom）
題目：2021 語学カリキュラムとは　～その詳細と今後の展望～
プログラム
　・はじめに
　・新カリキュラム説明
　・トークセッション
　・質疑応答
　・おわりに
司会・コーディネーター：竹内教務部長（言語センター長）
発表者：大畑　甲太　英語教育運営委員会委員長
　　朝倉　三枝　初習外国語教育運営委員会委員長
対象者：本学教職員（非常勤教員含む）及び博士後期課程学生
出席者：学長
　　専任教員 16 名（英文 4、日文 2、コミュ 1、国際 7、
　　音芸・演奏 1、センター1）、非常勤教員 3 名、職員 21 名、
　　院生 1 名

ワークショップポスター

主催：フェリス女学院大学 FD 委員会
外国語による教授法プロジェクト⑥

2021 語学カリキュラム改革とは
～その詳細と今後の展望～

□ 日　時　2021 年 1 月 20 日（水）12:20～13:00
□ 会　場　オンライン　右記 QR コードからも参加できます。
Zoom ID: 828 8950 7269 パスコード: 198360
□ 対象者　本学教職員（非常勤教員を含む）及び 本学博士後期課程学生
□ コーディネーター　竹内　正彦　教授（教務部長・言語センター長）
□ 発表者　大畑 甲太　教授（英語教育運営委員会委員長）
朝倉 三枝 准教授（初習外国語教育運営委員会委員長）
□ プログラム
・はじめに
・新カリキュラム説明
・トークセッション
・質疑応答
・おわりに

＜開催趣旨＞
2015 年度から開始した「外国語による教授法プロジェクト」は 2020 年度で 6 年目を迎えます。
第 1 回（2015 年 7 月 8 日（水）実施）、第 2 回（2016 年 6 月 22 日（水）実施）のワークショップでは文学部及び国際交流学部において実際に英語を用いて授業を展開している先生方から授業運営における工夫や課題等について共有いただき、「外国語による授業展開の意義と効果」と今後の展開に向けた多くの課題について共有の機会を得ました。第 3 回（2017 年 7 月 26 日（水）実施）のワークショップは「音楽教育における外国語による授業展開」と題し、音楽学部の先生方を中心に、実技や表現といった特徴を持つ専門カリキュラムと文学部・国際交流学部との共通点・相違点等について意見交換を行い、音楽教育だけにとどまらない新たな学法や展開の可能性を探りました。
第 4 回（2018 年 10 月 24 日（水）実施）は、視点を変え、実際に外国語による授業を受けた学生をパネリストとしてゴ迎え、授業による効果や実際の変化などを聞くことで、課題や改善点の発見につなげることをねらいとし開催しました。
また、第 5 回（2019 年 7 月 10 日（水）実施）は、第 3 回のワークショップから 2 年の月日を経て、音楽学部専門科目における「外国語による授業展開」の実例を報告することとし、授業運営する本学教員の報告と、その授業の履修学生を交えたトークセッションを中心に展開することで、実践による音楽教育もしくは実践による実践教育の効果について確認しました。
第 6 回となる 2020 年度は、次年度より開始する語学教育の新カリキュラムの特徴について英語教育運営委員会委員長及び初習外国語教育運営委員会委員長から説明をし、両委員長のトークセッションをとおして本学の今後の教育にどのような変化をもたらしうるのかを組織いています。

主催：フェリス女学院大学 FD 委員会
問い合わせ先：教務課 語学担当（口井、大場、川口）
TEL:045-812-9118

ワークショップ概要

◆新カリキュラム説明

大畑 甲太　教授（文学部英語英米文学科）

語学カリキュラム改革の一環として 2021 年度から始まる新しい英語インテンシブ・コースの理念及び特徴について、要点のみご説明したい。

新カリキュラムの大きなコンセプトは「Learner から User へ」である。これは、これまで中学校・高等学校と英語を学んできた学生の視点で、学習者であることから使用者となることへの発想の転換、ひいては使用者としての意識を高めること目指すということである。教員の視点では、従来重点が置かれていた技能の習得（受動的）から、実際に言語を使用することを想定した英語運用能力の養成（能動的・主体的）に重点を移すということである。

では、実際にカリキュラムはどのように変わるのか。次に挙げる 4 点を軸とする。

(1) スキル別科目→目的別科目へ
　英語の学習者の視点から、使用者への意識の変換。技能重視から脱却し、学習者から使用者への意識を高めることを新英語インテンシブ・コースの柱とする。英語ユーザーとしての意識を高めるための 3 つのコア科目群を構成し、目的に応じた科目群を設置し、統合的に使用することを想定。

(2)　プロジェクトを基盤としたカリキュラム展開
　学生が様々なテーマをもとにグループでの研究発表をプロジェクト科目の中で行い、英語運用能力だけでなく、大学での学びとしての発信力・思考分析力・情報収集力・企画実行力など英語で学んだ体験を通して獲得する自信等から達成感を得ることが目的。

(3)　英語学習ポートフォリオの導入
　学生自らがどのような学習をしてきたか振り返ることとともに、達成したことを学生自身が認識していくことを目的とする。自律的な学習を促進する。

(4)　英語 e 科目の拡充
　専門教育との連携も含め、より実務・実体的なテーマを取り入れた授業を行う。

朝倉 三枝　准教授（国際交流学部国際交流学科）

(1)　これまでの初習外国語インテンシブ・コース
1年次後期から2年次後期までを基礎とし、文法・書く・話す・読む・LLの五技能を中心に体系的に構成されている。3年次は、読む・話す・書く・LLのうちから学期ごとに1単位のみ。
(2)　これまでの問題点
① 学んだ言語を使用する場所・機会が十分に提供されていない
② 3年次Ｖi・VIi で履修者が激減する傾向
③ 初習外国語インテンシブ・コース履修者はコース修了要件以上の科目を履修しない傾向
(3)　新カリキュラムでの改革
学生にとってより魅力的な科目として、アクティブラーニングを導入した総合科目を設置。
2 年次後期まで学んだ五技能に終わらず、フィールドワークなどを含めたアクティブラーニング型にすることで、学生が五技能を使用しつつ、研究・調査成果を発表する構成となっている。
学生自身が自ら課題を設定し、調査し、発表するアクティブラーニング型であり、加えて、本学の特徴として、各担当教員が専門分野を持つ教員であることから、その専門分野を生かした科目運営を行うことができる。

◆トークセッション（質疑応答形式）

Q1.英語を学ぶのではなく、英語で学んでいくという主体的・能動的な学びを柱とした教育を構成した動機とは？
A1.英語はある程度、中高を通して基礎を学んでいるが、大学で学ぶ英語とは何か。将来的には英語を使って何かを成し遂げる、ということを想定した教育構成とした。スキルだけではなく、英語を使って何かを成し遂げた経験を得ることを目的とした。（大畑）

Q2.初習外国語ではどうか。
A2.コマ数も多いため言語に触れる時間は多く、低年次までは学生自身もモチベーションは高いが、使用できる場所がなく、高年次になればコマ数が減るため、学生のモチベーションが下がっていく。高年次に今まで培った語学力を活かすことができ、学生にとって魅力的な科目があれば、学生のモチベーションを維持向上できるのではないか。（朝倉）

Q3.語学科目と専門科目の接続について、普段の授業において感じることはあるか。
A3.学生は、語学科目を履修しつつ、各学部学科で専門科目を学んでいるが、科目間で関係があれば学生は興味を持ち知識を活かすことができる。語学科目で学んだことを専門科目で、逆に専門科目で学んだことを語学科目で活かせるような科目間に連携があれば、学生にとって学びやすく意欲向上につながりやすいと考える。（大畑）
語学科目で学んだことが専門科目につながり、活かせることに気づいたとき、学生は学びの意欲が向上する。それは、大学の学びの魅力であり、語学教育においても魅力が充実していくのではないか。（朝倉）

Q4.専門科目との接続については、特に大学院進学などのために非常に有用と思われる。また、ポートフォリオについては、その成果を学生への特典などにうまく反映できないか。
A4.ポートフォリオは、振り返り・学習成果を示すだけでなく、達成を蓄積するある種の証明として成立すると思われる。就職活動などで活かせるよう形として残すことを考えている。特典として検定受験など学生にメリットのある何らかの形で今後検討していきたい。CA など航空業界などの専門知識を学べるよう、英語ｅ科目で開講できればよいと思う。（大畑）

Q5.英語で学ぶ専門科目とインテンシブ・コースとの連携はどのように行う予定か。（松本）
A5.インテンシブ・コースは全学部向けコースのため、インテンシブ・コースにおいては、英語の素地を育成し、専門科目で本格的に英語を使用して学ぶことができるような形を想定している。（大畑）

Q6.専門科目は2単位であるのに対し、語学は1単位。初習外国語インテンシブ・コースの総合科目を実施する場合、実際に言語を使うよりは日本でフィールドワークをするのであれば文化に触れるという面が強

く見える。また卒論などもその言語で作成するくらいまでできたら良いと思う。(杉之原)
A6.単に文化に触れるというのではなく、ネイティブの方にインタビューしていくなど実際に言語を使う機会を含ませていきたい。ただ、新規科目のため手探りの部分もあるため、試行錯誤しながらも導入していきたい。また、卒論については、オリジナルの論文を作るうえで、言語を学んできたことやその言語の資料を活かしたものを作成していけるようにしたいと思う。(朝倉)

◆おわりに

・全学の語学のカリキュラム改革として、今後は他のコースについても改編を考えていきたい。また、専門科目との接続についても、こういった勉強会を通して検討していきたい。(大畑)
・学生自身が他の科目との関連を考えながら履修できるように、積極的な学習を進められるよう検討していきたい。(朝倉)

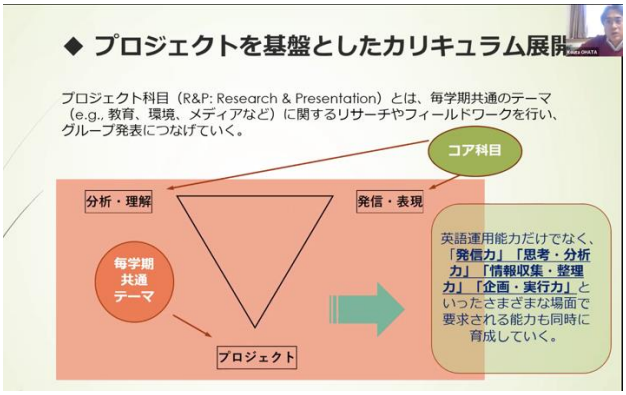
◆アンケートから

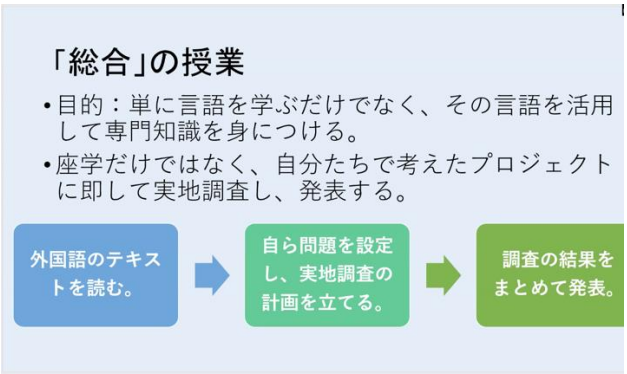
【ワークショップに参加して、参考となる情報や気づいた点】
・教員側の情報共有と線引きの意識化が重要であることにあらためて気づかされました。ありがとうございました。
・専門科目における「外国語による科目」との接続の観点を新たに得た。英語インテンシブでは専門科目における英語による授業科目の修得を以ってプロジェクト科目の修得に代えるということも可能かも。
・時間は昼休みで参加しやすかったので「長さもちょうどよい」にチェックを入れましたが、一方でもう少し質疑応答をしたかった気もしました。オンライン開催というのも参加しやすくよかったです。
・特に海外実習科目でも、学生たちの能力に応じて現地での語学実践の場をより多く提供していければと思いました。
・英語で専門科目の授業を実施している非常勤講師からのコメントの内容も参考になったが、何よりも「これまでは参加が難しかったが、遠隔で実施したことで参加できてよかった」という一言があり、遠隔で実施する有用性が再確認できた。

【ワークショップの内容に関するご意見やご質問】
・大畑先生のｅ科目と専門科目の連携については私も関心があるので、今後も意見を交換できればありがたい。朝倉先生のフィールドワークを取り入れたお話も参考になった。いまコロナ禍で実施が難しい状況にあるが、YouTube の美術館紹介などの動画を取り入れるとか、そのようなことをお考えなら、またご意見をうかがいたい。
・非常勤の先生も仰っていましたが、このように説明機会をいただけると、とてもわかりやすいです。
語学担当の諸先生方のご尽力に心から感服し、今後のさらなる飛躍とチャレンジを期待いたしております。
・少し駆け足でしたが、遠隔でお昼の時間帯に実施することで様々な教職員が参加しやすくてよかったと思いました。

【次回以降の開催テーマの希望について】
・専門科目で外国語による授業を担当されている非常勤教員の事例報告
少し先になると思いますが、語学のカリキュラム改革後、専門科目にカリキュラム改革の影響や変化が出るようであれば、その点をテーマにしてワークショップを開いていただきたいです。

◆ワークショップの様子


◆ プロジェクトを基盤としたカリキュラム展開
プロジェクト科目（R&P: Research & Presentation）とは、毎学期共通のテーマ（e.g., 教育、環境、メディアなど）に関するリサーチやフィールドワークを行い、グループ発表につなげていく。
コア科目
分析・理解
発信・表現
毎学期共通テーマ
プロジェクト
英語運用能力だけでなく、「発信力」「思考・分析力」「情報収集・整理力」「企画・実行力」といったさまざまな場面で要求される能力も同時に育成していく。


「総合」の授業
•目的：単に言語を学ぶだけでなく、その言語を活用して専門知識を身につける。
•座学だけではなく、自分たちで考えたプロジェクトに即して実地調査し、発表する。
外国語のテキストを読む。
自ら問題を設定し、実地調査の計画を立てる。
調査の結果をまとめて発表。

2 第１回FD勉強会
遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは
～これまでの振り返りとコロナ後の活用に向けて～

日時：2020 年 6 月 24 日（水）　12：20～13：00
会場：オンライン（Zoom）
題目：遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは
～これまでの振り返りとコロナ後の活用に向けて～
プログラム
・はじめに
・事例報告及びトークセッション
・質疑応答
・おわりに
コーディネーター：梅﨑副学長（全学教育担当）
発表者：山崎 浩一　准教授（文学部コミュニケーション学科）
朝倉 三枝　准教授（国際交流学部国際交流学科）
土屋 広次郎　教授（音楽学部音楽芸術学科、演奏学科）
挨拶：荒井　真　学長（大学ＦＤ委員会委員長）
対象者：本学教職員（非常勤教員含む）及び博士後期課程学生
出席者：学長
専任教員 28 名（英文 5、日文 4、コミュ 6、国際 7、音芸・演奏 5、センター1)、非常勤教員 16 名、職員 23 名、院生 1 名
ビデオ閲覧：専任教員 5 名（日文 1、国際 3、音芸 1)、非常勤教員 7 名、職員 3 名（2020 年 7 月 7 日現在）

勉強会ポスター

2020 年度第 1 回大学 FD 勉強会

遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは
～これまでの振り返りとコロナ後の活用に向けて～

◆ 日　時　2020 年 6 月 24 日（水）12：20～13：00
◆ 会　場　オンライン（Zoom）
◆ 対象者　本学教職員（非常勤教員含む）及び博士後期課程学生

◆ コーディネーター　梅﨑 透　副学長（全学教育担当）
◆ 発表者　山崎 浩一　准教授（文学部コミュニケーション学科）
朝倉 三枝　准教授（国際交流学部国際交流学科）
土屋 広次郎　教授（音楽学部音楽芸術学科、演奏学科）

◆ プログラム
・はじめに
・事例報告及びトークセッション
・質疑応答
・おわりに

◆ 参加方法
以下のリンクもしくは右記の QR コードより Zoom ミーティングに事前登録すると
ミーティング参加に関する情報の確認メールが届きます。
https://zoom.us/meeting/register/tJ0tceGqqDMrE0KD2oNW0psw0T11UpdRBuVV
※フェリスのアカウント（～@ferris.ac.jp）で登録してください。

〈開催趣旨〉
新型コロナウイルス感染症～への対応のため、2020 年度前期の授業については、強制としてすべて遠隔授業で実施することとなった。遠隔授業とは、大学に登校しないで、自宅等で受けることができるインターネットを使った授業のことで、本学においては次のようなものが想定される。
① 会議システム「Zoom」などを使ったオンライン授業
② 動画を配信するオンデマンド授業
③ Ferris Passport を利用した課題学習　など
授業を行うすべての教員に対して、Web 会議システムを利用する授業の調査会を 10 回近く開催し、円滑な授業開始を目指した。そのうちで、5 月と 6 月に本教員・学生に対し実施した授業実施状況調査においては、教員・学生それぞれの遠隔授業に関する課題も検討されている。
梅﨑副学長（全学教育担当）をコーディネーターとして、複数の本学専任教員からの具体的な事例に基づいた報告を踏まえつつ、遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは何か、何を行うべき点は何かを考える機会をもつ。

主催：フェリス女学院大学 FD 委員会
問い合わせ先：教務課ＦＤ担当（江井、猪股、大谷）
TEL:045-812-9118

勉強会概要

◆はじめに（梅﨑副学長）

大学授業の遠隔化は各種メディアで取り上げられ、議論になっている。本学における遠隔授業は、比較的順調に実施できているように見受けられるが、教員ごとにさまざまな悩みを抱えている。学びの形態や今後の活用を考えるにあたり、各学部から１名、それぞれ主に教職、語学、音楽実技の観点から遠隔授業の実施状況について発表していただき、実際に体験されている様々な苦労や発見を共有することで今後の方針を考えるきっかけにしたい。

◆事例報告及びトークセッション

山崎 浩一　准教授（文学部コミュニケーション学科）

授業準備の負担はあるが、原則として Zoom のビデオを「オン」にすることで学生の反応がわかり、過年度に作成したコンテンツをうまく活用するなどしていることから、大きく苦労している点はない。例えば、講義科目「教育心理学」では、サンドイッチ方式（Zoom で講義実施→Google Classroom でパワーポイントの動画視聴+それに関連する課題提出→Zoom で質疑応答）を採用することで個別対応が可能となり、遠隔授業のデメリットを最小化している。

一方で、教職課程「教科教育法」担当教員にヒアリングを実施したところ、次のような様々なデメリットが浮かび上がってきた。

・Zoom が立ち上がるか毎回不安でストレスを感じている。
・学習姿勢や態度、理解度等学習状況の把握が困難であり、将来教壇に立つ学生の指導を難しくしている。
・個別指導（机間巡視）ができないことで、学生が他の学生の質問等を聞くことができず、カクテルパ

ーティー効果が期待できない。
・模擬授業の実施ができない（教師役の全体像が見えないこと、教師役のアイコンタクトやジェスチャーが生徒役に届かないこと、指導者の模擬授業モデルを実演できないことなど）。
・学生からは、終始集中し続けなければならないことからの疲れについても指摘があった。
・書字の指導が困難である。
・グループワークの共有が困難である。
ただ、次のとおりメリットもあった。
・資料の提示、切り替えが容易であることから、学生にとっても見やすく、集中力が持続しやすい。
・スピーカーモードにすると１対１で話をしている感覚となり、学生を近くに感じられる。
・チャットを利用することで質問しそこなう学生が少なくなり、全体に対してチャットで質問をさせることで、学生同士の教えあう雰囲気が醸成できる。
・ブレイクアウトセッションを使用することで効率的にグループワークの指導ができる。
・教室移動のタイムロスがない。
・動画の見直しができる。
・「大学に行く」というハードルがないことから、授業の参加率が高くなった。
・学生自身の課題の提出状況がパソコンで確認できる。
・遅刻することがない。
・紙ではなくデータで管理することで、資料を失くさなくなった。
上記を受けて、コロナ後「遠隔授業」をどのように活かしていくのか、次のようなことが考えられる。
・学内、遠隔のハイブリッド授業を展開することで、登校困難学生への補償教育とする。
・教育実習において遠隔地からの中継授業を実施する。
・授業コンテンツを蓄積しておくことで、学科や時限の壁を越えて提供していくことができ、学生サービスの向上につなげる。

朝倉 三枝　准教授（国際交流学部国際交流学科）

フランス語責任者として、語学科目教育を中心に次の点に絞って話したい。
⑴ パワーポイントの活用
「初習外国語Ⅰ（入門）」科目で使用している共通テキスト『Varietas』を購入していない学生が各クラスに一定数いたことから、パワーポイントを活用して授業を展開した。スマートフォンなど画面の小さな端末を使用してクラスに参加する学生を踏まえて、色分けや、注意点を目立つように示すなど工夫した。平時は黒板を使用していたが、学生にとってはパワーポイントを使用して説明するほうが理解を促しやすいかもしれない。また、教科書では白黒写真だったものをカラーで示すことで学生がより興味をもって話を聞いてくれていると感じている。また、参考として Youtube など web 上の情報を示すなど柔軟な授業運営が実施できており、対面授業が再開された後も適宜取り入れていきたい。
⑵ 発音・会話の練習
学生のマイクはオフのまま、教員の後に続いて発音させている。その後、何人かの学生に発音してもらい、教員が確認している。時間に余裕がある場合は、Zoom のブレイクアウトルーム機能を使用し、3～4 人のグループに分け、発音・会話を練習させている。問題点として、顔を出さない学生がいることがあげられるが、発音などの際だけでも顔を出すことで学習効果が高まる旨を学生に説明し、顔を出させることでうまく授業運営ができるようになった事例もある。
⑶ Google フォームを使った小テスト
毎回実施している 7 問程度の小テストでは、授業を受けていて困ったことや感想、質問なども書かせている。学期開始当初は Zoom の入室がうまくいかなかったことなど技術的な内容に言及する学生が多かったが、最近では授業の内容そのものに対する質問や感想を書く学生が増えてきた。対面で授業を実施していた場合よりも多くのコメントがあり、今後もこのような形式の小テストは実施していきたい。なお、重要な質問については、次回の授業内で共有するようにしている。一方で、語学のクラスの中でもレベルが高いものについては、小テストの内容が選択式だけではなく記述式を取り入れる必要

がある。そのような場合、アクセント記号付きやその他複雑な文章になってくると採点機能がうまく使えない場合があり、紙の筆記試験の良さを痛感している。何か有効な方法があれば共有していただきたい。

なお、遠隔授業の実施が決定された後に教務課が10回程度開催したZoomの説明会や英語教育運営委員会で主催した説明会に主に初習外国語のネイティブの教員が参加したことで、比較的円滑に遠隔授業を開始することができたことに感謝したい。

土屋 広次郎　教授（音楽学部音楽芸術学科、演奏学科）

演奏学科は大半が実技科目であり、オンラインでの開講は困難を極めることが予想されたが、開講せざるをえなかった。一方で音楽芸術学科のPA科目（有料実技レッスン科目）は休講した。その中で見えてきた遠隔授業における各授業形態の特徴は次のとおりである。

(1) オンデマンド、課題授業
- 一方通行による齟齬（コミュニケーション不足等）
- 担当教員への質問に対する回答時間までの長さ

(2) PCを使用した授業、講義科目
- PC教室は、既に同じOS、ソフトがインストールされているが、遠隔授業では学生のPC環境がそれぞれ異なるので、自分の環境整備をしてスタートラインに立つのが大変である。
- 講義授業は大教室での一斉授業で話を聞くだけの講義より、ブレイクアウトセッションでグループディスカッションすることで、学生の能動性が高まり、学習効果、満足度も高くなっている。
- 通常授業なら、15週の中盤で2割程度出席者が減るが、今学期は多くても1割程度である。
- 履修人数の多い授業について、大教室で実施するよりも、Zoomを利用するメリットを、教員・学生が共通して感じた。

(3) オンラインレッスン（個人、グループ）
- 自宅での演奏環境がない学生が多く、大学の楽器、練習室の使用ができないため、遠隔レッスンや練習そのものが不可能である。
- 音楽の実践を伴う学び（自習）は重要であり、レッスンだけでなく、練習室が使えないことは学習環境の提供の問題に関わっている。
- タイムラグがあること、音質、響きの把握が困難であること、マイクとの距離の違いが音量の違いとなることなどが致命的である。
- 合唱、アンサンブル科目は同時に演奏するという最も重要なことが技術的に実現できず、個人レッスンのような状況になってしまう。

なお、自身が担当している実技科目「オペラ」では、座学内容を増やし、歌唱表現と表情だけで実施している。自宅で録画したデータはGoogle Classroom等で提出させている。タイムラグが少なく、複数名でのセッションが可能なNetduettoというツールを検討したこともあったが、PC環境が整わないと使用できないことがわかり、Zoomを使用することになった。Zoomでは、タイムラグがあるので伴奏はほとんど行わない。リズムは合わせず各フレーズの掛け合い、相手はセリフのみにするなど工夫し、日本語のセリフで表現内容を体得するようにしている。その結果、オンライン授業ではノンバーバルコミュニケーションは難しいが、その一方でパラランゲージは重要であることがわかった。

実技を学ぶということは、「技法」「歴史背景」「様式」だけでなく、「その場で」演奏を聴き合い、感じ学び取り、伸び伸びと表現することであるが、オンラインで圧縮加工された音では困難である。また、学生にとっても、学費相当の満足感がない。一方で、オンラインのメリットとしては、レッスンでは板書をしないため、社会背景や様式などをパワーポイントで説明できること。オンラインのレッスンで指導しきれないところなどは練習課題を与え、演奏している動画等提出することにより、通常時よりもディスカッションができること。欠席がないこと。大人数だと実技系科目の実施は難しくなるが、講義科目においては実施可能であることなどがあげられる。

学生の練習・演奏環境の問題から、対策をとりつつ対面レッスンを前向きに検討してほしい。

◆おわりに

講評　（梅﨑副学長）

事例報告及びトークセッションにおいて共有された、多様な発見、気づき、困難な状況についてこの場で全てまとめるのは難しい。今後検討していく課題として時間をかけて咀嚼したい。アンケートを実施するので、そちらでのご意見等もふまえて、今後遠隔授業の形をどのように活用しながら対面授業に活かしていくのか考えていきたい。

挨拶（荒井　真　学長（大学ＦＤ委員会委員長））

それぞれの場で様々な困難に立ち向かっていただいていることに心から感謝したい。特に音楽実技については難しい問題があるので、可能な限り対処していきたい。一方で、オンラインのメリットについては今後も活かしていきたい。

◆アンケートから

【勉強会に参加して、参考となる情報や気づいた点】

・先生方がどのように授業を展開されているか、何に困っているのか等具体的に聞けて参考になりました。職員でも大人数に対して説明会を行う際に学生のリアクションが分からないので苦労することも多く、状況は同じでいかに見せ方を工夫していくのかが必要だと思いました。
・コロナ以後の展望について、ハイブリッド授業の形態が参考になりました。補償教育ですよね。
・他の音大等のコロナ対策を参考に、演奏学科のレッスン再開を検討する必要があると思った。
・オンラインの方が参加しやすい。オンライン授業形態について思ったよりもいろんな利用方法がある。
・自分自身がオンライン授業のメリット・デメリットと思っていた部分と、ほかの先生方が指摘されていた部分がかなり重なっており、ある程度共通した感触であることが確認できてよかった。また、実習・実技系授業の困難さについては、後期自分自身も学外実習系の授業を担当しているため、身につまされるものがあったが、後期もオンラインになった場合のプランを練る上で、大変参考になった。
・どの先生方もそれぞれのお立場でご苦労なさりつつ最大限の努力をされていることが感じられ、自分ももっと頑張らなければと大変励みになりました。特に音楽系の先生や学生さんたちのご苦労が改めてよく分かりました。
・Zoom での顔出しについて、ちょうど気になっていたので参考となった。実技を担当しているが、Zoom で顔を出さない理由を聞くと、「父親から Zoom は危険なので絶対に顔を出すなと言われているので出せません」と言われた。さすがに強制はできないが、実技で体全体が映らないと指導もできないため、現在非常に困っている。また同じ履修者から「インスタに動画をアップしている知り合いもいるため絶対に出したくない」とも言われ、そうしたセキュリティについて、動画をアップした学生を大学では罰することができるのかも知りたい。
・音楽学部の演奏の授業の様子がよくわかりました。
・FD 講習会は、教員のニーズに合わせてやれば人が集まることがまずよく分かりました。それが一番大切ですよね。
・朝倉先生が報告されていた、Google フォームの小テストの最後に質問や感想を書いてもらうというアイデア。ぜひ真似させていただきます。
・メリットとして、板書よりも見やすい、写真などがきれいに見せられる、出席率が高くなる、などが参考になりました。
・Zoom に限らず、Google Classroom の使い方や、応用について分からないことがたくさんあることに気がついた。(使いこなせていない)
・Google フォームの小テストの最後に学生の授業への質問や感想を書く欄を設け、そこに学生から通常より多くの反応があったということは大変参考になりました。
・朝倉先生から「ネイティブの先生と面識のある 3・4 年生は抵抗なく顔出しでの参加であったが、2 年

生はビデオ OFF だったので非常勤の先生がやりにくさを感じていた。朝倉先生から学生に「顔出しの方が指導を受けやすい」と働きかけた結果、全員協力してくれるようになった」といった具体的な学生への指導と反応が披露されたこと。また、非常勤講師と学生を繋ぐ役割（コーディネイト）を専任の先生が果たされていることを改めて認識できました。
・朝倉先生の PPT 活用が学習意欲向上に効果的であるという話。
・オンライン授業のプラス面、マイナス面が良く整理されていて、共感したり、科目の性質による問題点の違いもわかったりして、大変意義深い時間だった。
・質疑応答の内容が深ければ更に良かった。
・パワーポイントや参考資料の有効活用について分かりよかったです。また他の先生方がオンライン授業をどのように展開されているのかを知ることができ大変参考になりました。"
・それぞれのお立場からのご発表で、大変参考になりました。
・ZOOM 授業から Google Forms の小テストに至る流れは私も試みており、参考になった。あとはこれを期末試験にどう応用しようか頭を悩ませているので、そのあたりのアイデアを他の先生から拝借したい。
・遠隔地からの中継授業、という新たな授業スタイルも視野に入れられること
・学部や科目の種類によって、状況に違いがあることがよくわかりました。その中で、声をあげられずに困っている学生の存在は重要なご指摘であると思いました。
・教職、語学、音楽実技という三者三様の立場からの視点は、遠隔授業のメリット、デメリットを明確化するうえで有用であった。様々なご苦労があることがうかがえた一方、そこから捻出された方法は、対面授業でも活かせると思えるものもあり、大変参考になった。
・大人数の講義科目において受講生の反応が教室より確認できる面があること、授業以外の通信環境の問題が先生方と受講学生に負担になっていること、音楽学部の実技レッスンの校舎での再開・レッスン室利用再開がないと授業料で担保される教育が実施できな状況なこと、を改めて認識しました。
・TA として参加しました。これまで、オンラインの授業に参加していたので、メリット、デメリットは実感を持って学ぶことができました。
・オンライン授業がどのように進んでいてメリット・デメリットは何なのか、具体的にどの機能が多く使われているのか、学生の感触はどうなのか、など他部署にいると直接聞く機会が無かったので、今回の FD で知ることができ大変ありがたかったです。
・ビデオをオンにしてくださらない学生さんが一定数いらっしゃることがわかりました。また、私は Ferris Passport しか使っていないのですが Google Classroom が活用されていることを認識しました。動画提出課題を出すかどうか迷っていたので、他の先生もお出しになると知り参考になりました。
・何人かの学生に当てて、一人ずつさせる。必要な時は、顔を出してもらうと反応が分かる。
・語学科目を担当している者として、朝倉先生のご発表はとても参考になりました。私自身がその言語の母語話者ではないこともあって、オンラインで発音や会話の練習は難しいと考えひとまずはお手本となる音声を聞いてもらい、その後文字に起こして音のイメージだけをつかんでもらっています。マイクをオフのまま繰り返してもらい、その後あてるという方法は今後ぜひ取り入れさせていただきたいと思いました。
・オンラインに適した科目とそうでない科目があることがはっきりした。
・オンライン授業のメリットもあると感じていたが、他の授業でも同様の報告があり、共感できました。ブレイクアウトセッションを積極的に活用されているというご報告から、担当授業でも、さらに工夫をして取り入れてみようと思いました。
・一方通行になりがちなオンライン授業で、それぞれの先生方が学生の反応を確かめたりグループワークをとりいれたり、工夫されていること。(Zoom と Google Classroom を併用する、語学の授業で時々学生に指名して答えてもらう、全体練習の後ブレイクアウトで会話練習するなど)
・パネリストの具体性の提示に自身の授業を活用するにあたり、参考になった。
・実技（音楽）の難しさがあらためて良くわかりました。

【勉強会に内容に関するご意見やご質問】

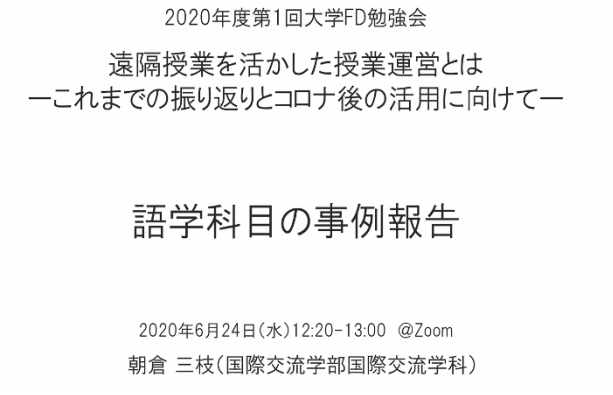
・タイムリーに、多くの教員の現実的なニーズに合致した大変よい勉強会だったと思います。FD 活動とはこういうものなのだ、というお手本のような勉強会だったのではないでしょうか。コロナがきっかけではありましたが、今後も今回のように、教員の多くが参加したくなるような FD 研修会が開かれるといいなと思いました。報告された先生方のご報告もいずれも素晴らしく、具体的かつ現実的なご指摘が、いずれも大変勉強になりました。ありがとうございました。
・今後もぜひオンライン授業の勉強会をお願いします。
・特になし。いろいろなことが分かり、参考になりました。
・他の先生方がどういう授業をされているのか全然知らなかったので、3 人の先生方の具体的な事例報告がとても有益でした。ありがとうございました。
・今回は時間的に難しかったと思いますが、遠隔授業の実際の運営方法（ブレイクアウトルームへの円滑な振り分け方、など）、授業準備の工夫なども情報共有できると良いかと思いました。
・各先生方の使っているツールや素材(ソース)についてもう少し詳しく知りたいです。
・オンラインレッスンの状況と課題について、現場の先生からの声をきくことができて参考になりました。
・遠隔授業での先生方にとってのメリットは直接聞く機会がなかったので勉強になりました。
・昼休みの開催は参加しやすくよかったが、時間が短く質疑応答ができなかったのが残念だった。
・より多くのオンライン授業での成果と課題を知りたい。
・タイムリーでよかったです。
・今年度関心の中心となるテーマで、自分自身の授業を振り返る大変よいきっかけになりました。
・昼休み＋オンライン＋全教員が直面している課題ゆえに参加者が多かったと思われるが、自由な発言の時間を設け、発表者以外の教員の工夫なども聞いてみたいと思ったため、1 時間程度の時間があるとよかったと感じている。（もっとも、人数が多かったので、自由な発言を始めるときりがなかったと思いますが）
・オンラインで先生方がどのような工夫をされているかを知ることができ、参考になりました。
・TA は授業のアシスタントなので、遠隔授業の技術的な研修を受ける機会がありません。私の場合チューターもしているので、これを機会に「TA 向け」に遠隔授業のための技術研修(基礎でいいので)を受ける機会を作っていただければと思いました。実際自分で動かすことで、今回の研修内容が実践で役立つと考えます。ご検討よろしくお願いします。
・教務課の皆さん、お疲れさまでした。
・とても参考になりました。
・従来の知識伝授型の授業をオンラインでやるときの工夫やアイディアが知りたい。
・実際の授業の様子が分かり安心しました。先生方それぞれのアイディアで奮闘されており、こちらも勇気づけられました。黒電話の話は、興味深く印象的でした。
・発表された 3 人の先生方の授業は、準備や学生へのフィードバックにかなり時間や技術的な負担がかかると推測します。とても参考になりましたが、他大学も含めて週 13 コマの授業を担当している私は同じようにできません。
・もう少し時間を拡張して Q&A があると良いですね。

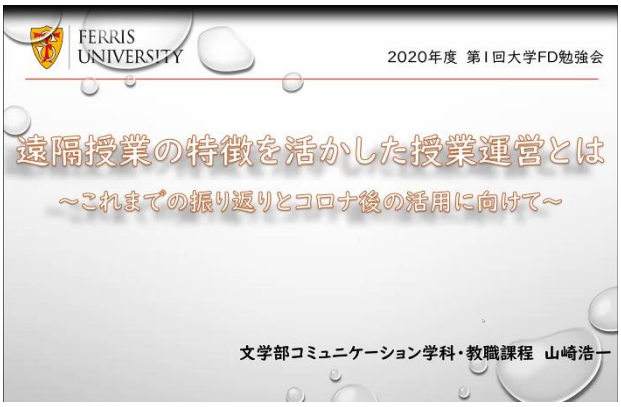
【講演会の運営・進行等について】

・今回は、質疑応答の時間が取れませんでしたが、今後は勉強会のテーマに沿った内容であることを前提として、あらかじめ聞きたいことや、今直面している困難な事例などを事前に集めて置く等の対応もあっても良いかと考えました。
・時間が限られていたのでしかたないと思いますが、質疑応答や、報告者以外の先生方の授業経験などについてもやりとりができるとさらによかったかな、とは思いました。非常勤の先生なども参加されていたので、専任に対して質問したいこともあったかもしれないな、とも思いました。
・本日の講演会を含め、オンライン授業にかかる全般について教務課の方々のサポートが大変心強く、心から感謝しております。どうもありがとうございます。

・今の時点で思い浮かびません。3 人の先生たちの報告というのもちょうどよかったし、それぞれ 10 分程度というのもちょうどよかったです。タイムリーな企画をいただき、感謝です。
・参加者が非常に多かったので、FD 講演会をオンラインで行うことはとても良いと思います。今回のように情報共有がテーマの場合は特に有効だと感じました。また、オンラインだと興味を持っている職員も参加しやすかったのではないかと思います。
・今回のような勉強会を定期的に行ってほしいです。また、各ソフトやツールの使い方についての具体的な方法を学ぶ機会もあると助かります。
今回の内容をもう一度復習したいので、データを転送いただけると有り難いです。
・いつも集客に苦労する FD 勉強会に、史上最大の出席者がいらっしゃったことに驚きました。切実なテーマであることと、オンラインであることの両方が理由かと思いますが、非常勤講師の先生にも参加しやすい形式であることがわかりました。
全体で 40 分間、という設定は適切だと思いますが、質疑応答を含めて終えるのは少し難しそうですね。終了後に「●●先生に聞きたいことがある人はこのように」とご案内できると尚よいと思います。ありがとうございました。
・勉強になりました。ありがとうございました。
・ビデオ参加について特に指定もなかったのですが、自分がするオンライン授業をする際に学生がビデオオフだと学生の反応がわからず伝わっているかどうか不安ということもあり、今日は顔出し参加をしました。ですが、ほとんどの先生はされておらず、オフでもよかったのかな？と思いました。最近は顔出し必須のセミナーなどもあります。参加の際に顔出し必須やどちらでも OK などのご指示があれば有り難いです。
・実施いただき、ありがとうございました。短い時間でしたが、他の授業の様子を伺うことが出来る貴重な時間でした。
・今後も ZOOM でこのように気楽に参加できる運営をしていただきたい。遠隔授業についての FD 講演会を ZOOM で行うことはとても意義のあることだと思う。
・勉強会の開催、どうもありがとうございました。
事前に、どのような内容（教職、語学、音楽など）がどの時間帯で行われるのかの告知があればなお良かったです。
・時間帯も参加しやすく、オンラインで見ることができ、大変良かったです。
・短時間でしたが、大変有意義な講演会でした。ありがとうございました。
・遠隔で実施したことやタイムリーなテーマ設定であったことで参加者多数となり、活況な勉強会になったことは大変よかったと思う。今後の FD 勉強会や講演会を実施するうえで参考になることが多分に含まれていたように感じた。
・最後の土屋先生が時間を気にされて、お伝えしたかった事がすべて言えなかったのではと思いました。お一人、お一人の時間配分の難しさも感じます。前の先生が長くなると、最後の先生は影響を受けるように思います。
・リアルタイムで参加できませんでしたが、録画を拝見することができたのでよかったです。時間、内容ともにちょうどよく、わかりやすく参考になりました。ありがとうございました。

◆勉強会の様子


2020年度第1回大学FD勉強会
遠隔授業を活かした授業運営とは
ーこれまでの振り返りとコロナ後の活用に向けてー
語学科目の事例報告
2020年6月24日(水)12:20-13:00 @Zoom
朝倉 三枝(国際交流学部国際交流学科)


FERRIS UNIVERSITY
2020年度 第1回大学FD勉強会
遠隔授業の特徴を活かした授業運営とは
～これまでの振り返りとコロナ後の活用に向けて～
文学部コミュニケーション学科・教職課程 山崎浩一

3　学修行動調査

2020 年度は昨年同様、Ferris 学修行動調査、ALCS 学修行動比較調査を実施しました。ALCS 学修行動比較調査は他大学と共同で行うため、本学の強み、弱みを浮き彫りにし、今後取り組むべき課題を明らかにすることを狙いとしています。

【Ferris 学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能・Google フォーム機能利用
実施期間	2 年次：2021 年 3 月 23 日（火）～4 月 12 日（月） 4 年次：2021 年 3 月 17 日（水）～31 日（水）
回答率	第 8 回：36.6%（2021 年 3 月 23 日付在籍者数：1,156 名、回答者数：423 名）※2020 年度 9 月卒対象者含む（19 名） 参考：前年度同時期　17.8%（2020 年 3 月 18 日付在籍者数：1,317 名、回答者数：235 名）
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【ALCS 学修行動比較調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証 (3) 他大学間との比較分析による現状把握
対象者	学部学生 1 年次生・3 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2020 年 12 月 14 日（月）～2021 年 1 月 25 日（月） 2021 年 1 月 26 日（火）～2021 年 2 月 1 日（月）
回答率	28.5%（11 月 10 日付在籍者数：1,229 名、回答者数：350 名） ※新型コロナウイルス感染症の影響により、遠隔授業を基本としていたことから、昨年実施したように授業終了時（一部授業内）に教室へ訪問して回答協力を得ることができなかったため、2019 年度と比較し、大きく回答率が下がる結果となった。
設問の概要	(1)経験（学修に関する経験） (2)時間（時間外の活動量） (3)成長（学修による変容の自覚） (4)満足（学修関連の満足度） (5)希望（学修に関連して望んでいること）

4-1 授業アンケートと授業改善計画

2020 年度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目	
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート（通常科目）：7 月 3 日（金）～23 日（木） 授業アンケート（集中講義）：第 1 ターム 8 月 24 日（月）～9 月 4 日（金） 第 2 ターム 8 月 31 日（月）～9 月 11 日（金）
	後期	授業アンケート（通常科目）：1 月 8 日（金）～1 月 25 日（月） 授業アンケート（集中講義）：第 1 ターム 2 月 1 日（月）～2 月 7 日（日） 第 2 ターム 3 月 12 日（金）～3 月 18 日（木）
回答率	（前期）32.8%　（後期）22.1%	

【授業改善計画】

対象者	全教員	
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート（通常科目）：7 月 27 日（月）～8 月 18 日（火） 授業アンケート（集中講義）：第 1 ターム 9 月 7 日（月）～9 月 23 日（水） 第 2 ターム 9 月 14 日（月）～9 月 30 日（水）
	後期	授業アンケート（通常科目）：1 月 27 日（水）～2 月 17 日（水） 授業アンケート（集中講義）：第 1 ターム 2 月 8 日（月）～2 月 17 日（水） 第 2 ターム 3 月 19 日（金）～3 月 28 日（日）
提出率	（前期）67.5%　（後期）75.9%	

4-2 卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

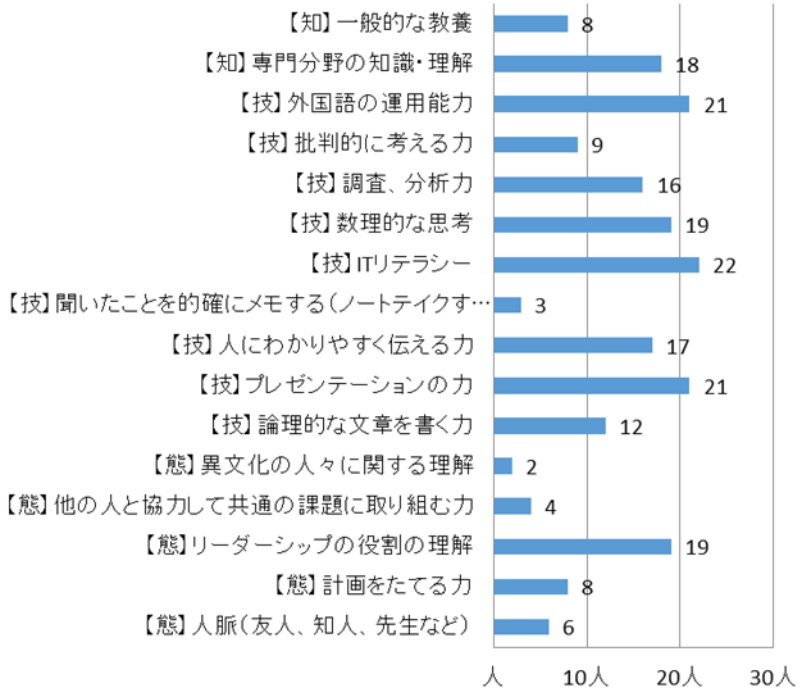
アンケートの結果からは、現在の仕事をするうえで不足していると思うものと、大学で身につけることができたものなどを比較すると「IT リテラシー・数理的思考」「プレゼンテーション能力」などいくつかのキーワードが挙げられます。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

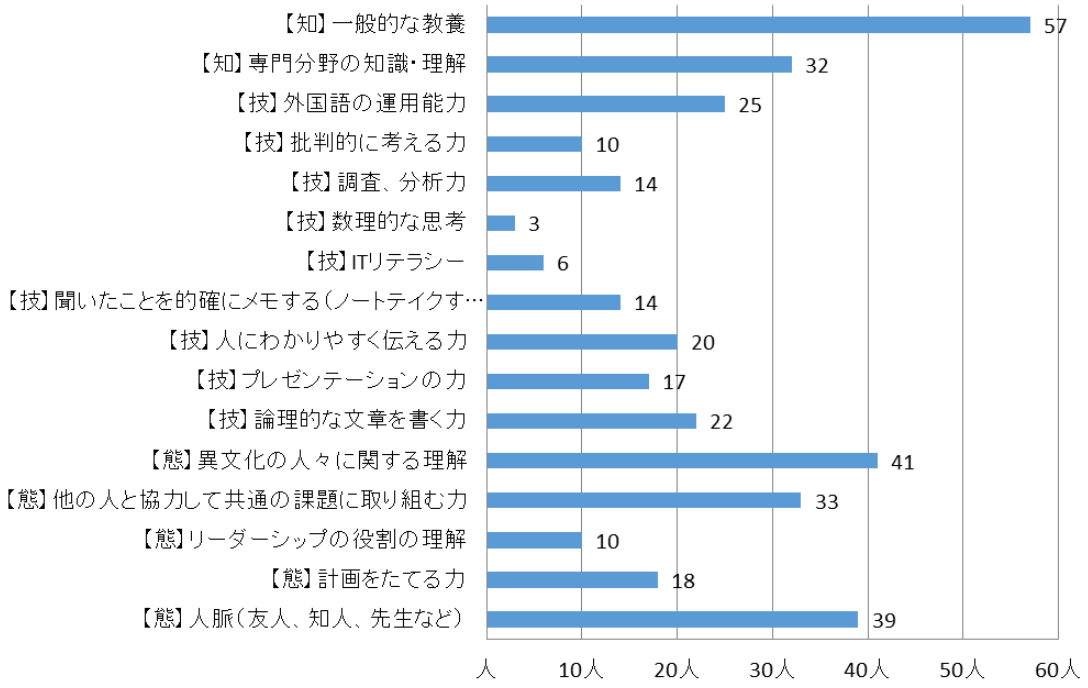
【調査及び結果概要】

実施期間：2020 年 10 月 1 日～30 日
実施方法：葉書で依頼し、web にて回答
対象人数：536 名（2015 年 3 月出学者）
有効回答：78 名（回答率 14.6%）

現在の仕事をするうえで不足していると思うものすべてにチェックをいれてください。



大学で身につけることができたものすべてにチェックをいれてください。



4-3 PBL 科目の推進

中期計画 17-20 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助が挙げられます。

2020 年度は、支援対象科目 1 科目（履修者数 3 名）のうち、申請のあった 3 名に 7,980（予算執行率 4.4%）の支援を実施しました。

4-4 大学院の FD 活動

2020 年度より、教育能力向上を目的として、大学院博士後期課程学生にプレ FD を実施することが、2020 年度大学 FD 活動計画に明記されました。対象の学生は、授業参観、FD 勉強会、FD ワークショップに参加して「FD 活動報告書」を提出しました。

5 2020 年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
4 月 3 日（金）～10 日（金）	FD オリエンテーション	英語教育運営委員会
5 月 3 日（日）～10 日（日）	前期授業実施状況調査（授業開始編）	大学 FD 委員会
6 月 4 日（木）～7 月 9 日（木）	前期授業アンケート実施（授業への要望）	大学 FD 委員会
6 月 17 日（水）	第 1 回音楽学部 FD 勉強会	音楽学部・音楽研究科 FD 委員会
6 月 18 日（木）～7 月 9 日（木）	専任教員による授業参観 （対象：専任教員担当科目）	大学 FD 委員会
6 月 24 日（水）	第 1 回 FD 勉強会	大学 FD 委員会
7 月 3 日（金）～7 月 23 日（木） 8 月 24 日（月）～9 月 4 日（金） 8 月 31 日（月）～9 月 11 日（金）	前期授業アンケート実施（学生の自己評価・成長）	大学 FD 委員会
7 月 27 日（月）～9 月 30 日（水）	授業改善計画	大学 FD 委員会
8 月 8 日（土） 9 月 19 日（土）、26 日（土）	Ferris English Teachers' FD Workshop	英語教育運営委員会
10 月 28 日（水）～11 月 5 日（木）	前期授業実施状況調査	大学 FD 委員会
11 月 12 日（木）～1 月 7 日(木)	後期授業アンケート実施（授業への要望）	大学 FD 委員会
12 月 14 日（月）～1 月 25 日（月） 1 月 26 日（火）～2 月 1 日（月）	ALCS 学修行動比較調査 （対象：1・3 年次生）	大学 FD 委員会

期間	テーマ、トピック	主催
1 月 8 日（金）～1 月 25 日（月） 2 月 1 日（月）～2 月 7 日（日） 3 月 12 日（金）～3 月 18 日（木）	後期授業アンケート実施（学生の自己評価・成長）	大学 FD 委員会
1 月 20 日（水）	外国語による教授法 FD プロジェクト⑥	大学 FD 委員会
1 月 27 日（水）～3 月 28 日（日）	授業改善計画	大学 FD 委員会
3 月 17 日（水）～4 月 12 日（月）	Ferris 学習行動調査 （対象：2・4 年次生）	大学 FD 委員会
3 月 24 日（水）	ハイブリッド授業デモ	大学 FD 委員会
4 月～2 月	教育の質向上に向けた取り組みーPBL 科目の推進	大学 FD 委員会
4 月～3 月	教育の質向上に向けた取り組みー大学院の FD 活動	大学 FD 委員会
10 月	教育の質向上に向けた取り組みー卒業生調査	大学 FD 委員会

以上